

基調講演

中世都市史研究からみた平泉

高 橋 慎一郎

はじめに

こんにちは。本日のタイトルは「中世都市史研究からみた平泉」となっておりますが、私は実は平泉というよりは鎌倉の研究を中心にこれまでしてまいりましたので、鎌倉についての話がかなり多くなってしまうことをまず最初におわびしたいと思います。平泉にも当然触れるわけですが、むしろ鎌倉からみた平泉というような視点の話になってしまうかなと思います。「中世都市鎌倉からみた平泉」というタイトルにしたほうがよかったかなと思いましたが、そこは御勘弁いただきたいと思っております。

とにかく、平泉より前の時代から話を始め、それから平泉の時代、それから鎌倉、さらに戦国時代にまで飛ぶような話になります。

1. 「都市」とは何か

まず最初に「都市」とは何かというところから話を進めていきたいと思っております。「都市」とは何かというすごく大きな話ですが、まず「都市」とはどういうものなのかという定義をしておかないと、「都市史研究からみた」とか言ってもよく分からないことになります。ただし、都市の定義は非常に大変な難問なのです。正直言って、結論は出ていないと言っていると思います。人類が古くから集合して住んでいたことは確かで、その集合して住んでいた空間的なまとまりというのは普通は「集落」と呼ばれているわけです。集落の中でも特別なものが都市と呼ばれて、そのほかは村落、村とされるのが一般的です。では、どのような集落を都市と呼ぶのか、これは実は様々な回答がこれまでに用意されていて、結局のところ、研究者が都市のどの側面を重視するかによって異なっています。極端に言えば、研究者が10人いれば、10人10通りの都市の定義があるということになってしまっていて、大変ややこしいことになっています。

そもそも「都市」という字に御注目ください。「都市」という語は「都プラス市」、「ミヤコプラスイチ」という形で表現されています。そのうちの「都」、ミヤコのほうは政治的な中心という意味になります。イチのほうは市場という意味ですから、経済的な中心という意味になるわけです。そもそも都市の中に2つの意味が含まれているわけです。政治的な中心という意味と経済的な中心という意味を組み込んだ言葉として、都市というものがあります。今日の講演の立場としては、政治的な中心のミヤコのほうの側面を重視して話をしたいと思っております。

今日の講演の立場としましては、都市を「典型的な都市とは、国（政権）の中心となる集落である」と仮に定義しておきたいと思っております。それを踏まえて、今日の都市史研究という中身は、ミヤコの歴史と言い換えてもいいかと思っております。特に政治的な中心としての都市の流れを見ていく中で話をすることになります。ミヤコの歴史、ミヤコといえば、国（政権）の中心となる集落でありますから、文字どおりミヤコ、首都、首府になります。これがその代表例ということになります。現代の日本の首都が東京であるように、近代国家においては首都というのは唯一無二の存在なのですが、近代以前には国家自体がそんなにはっきりとしていない時代でありますので、複数のミヤコの併存という

のも当然あり得たと考えております。日本の中にミヤコが幾つか同時並行的にあったとしても、それは不思議な話ではなくて、そういうこともあり得るのです。近代以降の首都は唯一無二ですけれども、必ずしもそうではないというのを前提として見ておきたいと思います。そうした幾つかあった日本のミヤコの歴史の中に平泉を位置づけていきたいとそういう目的がございます。いわゆる首都としての都ではなくて、政権の中心である政治的な中心都市としてのミヤコを想定しているので、片仮名の「ミヤコ」と表現させてもらいました。

2. ミヤコの登場

(1) 日本最古の都市

それでは、日本のミヤコで一番古いのはどこなのかと考えますと、ぱっとミヤコで思いつくのは奈良、平城京とかであるかと思います。あるいは平安京、京都といったものが頭に浮かぶと思うのですが、本当にそうなのか、日本最古の都市はどこかということです。

話は古いところまで遡りますけれども、日本の国がいつ成立したかという話にも関わり、日本の国がどういう形で出来上がってきたかということを振り返ってみます。恐らくは中国の律令制度をモデルとして、天皇を中心とした日本という名前の集権国家、これが出来上がってくるのを日本の国の成立と考えると、それは7世紀の後半、天武天皇とか持統天皇の時代がそれに当たります。694年に持統天皇によって遷都された藤原京というミヤコがあります。奈良の藤原京、これを最初の古代都市と見る説が古代史研究者の間では有力であると思います。藤原京が日本で初めての中国に倣った条坊制による方形の本格的な都城と呼ばれるものです。今の京都に行っても分かりますように、碁盤の目状の道というのが特徴的で、縦横直角に交わる碁盤の目状の道筋というのを条坊制言っていますけれども、これを導入したのが藤原京ということなのです。しかしこの前、先行する7世紀の初めに、これは聖徳太子とか中大兄皇子、後の天智天皇の時代に当たりますが、このときに既に地方を従えて、対外的にはいわゆる国としての存在を主張しており、国の体制は整っていたのではないかとと思われるのです。そうしますと、日本という正式な国号はできていないけれども、日本の国らしいものは既にできていて、その



〔鶴見2015より〕



〔鶴見2015より〕

中心として機能した、ミヤコとして機能したのはどこかということになると思います。そこで私は、日本最古の都市は飛鳥ではないかと考えているわけです。

飛鳥地方の現在の風景をみると、ちょうど中心部分に広く空き地のような空間があるあたり、この辺が飛鳥のミヤコ、つまり宮殿のあった、飛鳥宮の遺跡です。奥のほうに大和三山が見えるというそういう風景です。この飛鳥のミヤコについて見ていきたいと思います。592年に豊浦宮という宮が置かれ、推古天皇がここで即位をしているのです。飛鳥で最初の宮殿がここです。甘樫丘の北西の麓に位置しておりまして、後には豊浦寺という寺が建てられていて、現在は向原寺という寺院が存在しています。その後、少し東側の方に飛鳥の宮殿は移るわけですが、その間の距離そんなに離れてはおりません。この飛鳥地方を中心に、ほぼこの後ミヤコが置かれ続けるわけです。592年に初めて飛鳥に豊浦宮が置かれてから、次に藤原宮に遷都するのは694年なので、ほぼ100年間ですね。100年の間は、この飛鳥の地域にミヤコがあったと言っていいと思います。

(2) 藤原京の画期性

100年たった後に、飛鳥の北のほうに藤原京という本格的なミヤコがつくられます。これが694年です。今でも古代史研究者の多くは藤原京をもって日本の古代都市の出発点としているのですが、それだけ藤原京というのは画期的な存在です。何がそんなに画期的かといいますと、宮殿の周囲に条坊制を引いて京を設置したということが非常に大きなところなのです。飛鳥の時代は、宮殿はあったのですが、その周りに整備された条坊制、つまり縦横に垂直に区切ったような整然とした道は造られていなかったわけですが、藤原京の時代に初めて本格的なミヤコの形が出来上がるわけです。そのときには、さらに巨大な大極殿と言われる宮殿の施設ですとか宮城の門とか、それからミヤコの中に点在する官衙群、つまり役所、宮殿だけではなくて様々な役所の建物がその周囲に置かれるという、整然としたミヤコが初めて藤原京で登場します。これは見た目にも飛鳥の時代とははっきりと違う、大規模なミヤコが藤原京で登場しますので、藤原京をもって古代都市の最初と見るのは無理もないかなと思いますが、その源流としてはやはり飛鳥があるということを注目したいと思っています。

(3) 平城京の到達

続いて、藤原京の後は、皆さんよく御存じの平城京、奈良にミヤコは移ります。平城京におきまして、古代都市の一つの到達点を迎えることになります。奈良平城京では、ミヤコの正門である羅城門が設けられ、そこから一番北の端に宮城や宮殿が置かれるのですが、そこへ真っすぐに延びていく広くて長い朱雀大路というのが平城京で整備されます。この朱雀大路を中心として条坊制が引かれ、北の端に天皇の住むところが置かれるという、その形は平安京、京都へと継承されていきますので、平城京で一つの到達点、さらにそれが平安京でほぼ完成を見るという、そういう流れになるのだと思います。平安京の話はこれまでも膨大な研究成果があるので、今ここで触れる余裕はございませんので、思い切り省略させていただきたいと思います。

(4) ミヤコの分身としての国府・多賀城

平安時代へと話は移っていきつつあるわけですが、その前に平泉を含めた地方の状況にも触れていきたいと思っています。奈良時代に平城京という一つの到達点、国の中心、ミヤコの到達点が現れるのですが、ミヤコの分身として各地に国府が置かれていくのがこの時代でもあります。日本

の国は、それこそ山城国だけではなくて陸奥国とか相模国、武蔵国とか筑前国、筑後国とか、そういったいろいろな国に、律令制の中では分かれています。その国ごとに国の中心となる国府と呼ばれる場所があるわけです。国衙という国の中心となる役所があって、そこにミヤコから役人が派遣されてくる、そういう制度が整います。国府というのは、平城京、平安京とはもちろん違うのですが、それから権力を移譲されて、ある程度の国の支配を任されるという、政権の出張所みたいなものが置かれるわけですから、ミヤコの分身と言っていいかと思います。小型のミヤコということになるのでしょうか。そもそも国府を都市と見ていいのかという議論もありまして、国府は都市ではないとおっしゃる研究者もありますが、私は国府はある程度人々の集中があって、役所だけではなくてそれに関連する職業民たちも集まってきている場所なので、小規模ながらも都市と見ていいだろうという立場です。国府は都市、すなわちミヤコの小型版であると私は考えておりまして、国府の一つとして平泉ともつながりの深い場所として多賀城に注目してみたいわけです。



〔進藤2010より〕

多賀城は陸奥国府という位置づけになり、今でも多賀城跡の遺跡が残されておりますけれども、奈良時代に多賀城、陸奥国府が創設されております。その姿を復元した地図をちょっと見ていただきたいのですが、周りを築地堀で区画しており、真ん中に中心となる役所が置かれています。その周囲には様々な役所、官衙群が置かれております。政庁と呼ばれる中心的な建物から南へは、直線道路が真っすぐ延びていくわけです。これが中心的な部分なのですが、これだけですと、いわゆる官庁街、役所だけの姿ということになりますが、実は多賀城が都市であるというふうに判断したのはそれだけではない、このほかにさらに人々が集まり住むところが拡大しており、こちらはその都市、国府多賀城地域の復元図ということでありまして。右上のほう、いわゆる官庁街なのですが、そこからさらに南のほうに道が延びていき、さらに方格子地割、つまり直線道路で区切られた地割が区画がされている、そういう街並みが南のほうに広がっております。



〔進藤2010より〕

国府の一番偉い役人は国司ですけれども、国司の館は国府の南側のいわゆる官庁街ではないところ、国府域と呼ばれる南の拡大された部分に館がありまして、そこから役所へ通うということなのです。知事の公邸は街なかにあって、そこから県庁に通うという、そういう感じになっているわけで、こういった拡大された地域も含めると、やはりこれは都市と言っていいのだと思うわけですが、特にやっぱり注目していただきたいのは方格子地割、直線道路で区切られた、正方形とは言い難いところもありますが、かなり方形に近い形の区画、これは平城京を多少意識している街のつくり方と言ってもいいのではない

かと思います。こういったものが多賀城だけではなくて、日本各地の国府では似たようなものが出現しつつあったのではないかと考えております。これが奈良時代から平安時代ぐらいにかけての状況になります。

3. 武家のミヤコの萌芽

(1) 都市平泉の景観

少しまた時代を下っていきまして、武家のミヤコの萌芽として、いよいよ平泉の話になってまいります。北上川の流れが真ん中を縦に流れておりまして、その右岸に平泉の中心部が広がっているという、そういうところです。ここから先が皆さんよく御存じの話であるとは思いますが、一応おさらいも兼ねてざっと見ていきたいと思います。

そもそも都市平泉がいつから出現したのかということですが、これは12世紀の初めです。12世紀初頭に有力な武士である藤原清衡という人による都市平泉の創設がございました。それから、その後清衡の後を継いだ2代基衡、12世紀半ばになりますが、基衡によって都市平泉は本格的に整備されていきます。平泉という都市の性格はどのようなものであるかといいますと、もちろん当初はここは国府、国衙の機能を持っていたわけではありませんので、最初はいわゆる軍事政権の拠点という性格がよろしかろうと思っております。ある程度朝廷からは自立した地方軍事政権の拠点、すなわち武家のミヤコという性格を備えていたのだと思います。これまでミヤコというと、当然天皇が住んでいる平城京であって、それから朝廷の権限を移譲された国府までのミヤコの分身としての地方の政治都市というものがあつたのですが、12世紀の初めに初めて違うタイプのミヤコが現れ始めるということになるのです。それは武士の拠点であり、有力武士の拠点である、そういった性格のミヤコが現れる。武士が政治的に地方を支配するという、そういう立場にまで上昇しつつある時代が12世紀ということなので、ここに初めて武家のミヤコというものができてくるということになると思います。

平泉のそもそもの原初的な形態というのは、『吾妻鏡』や、考古学の成果によって分かってくるものですが、一番最初の清衡の時代の平泉というのは、まずは中尊寺があり、奥大道と呼ばれる東北地方を縦貫する大動脈というべき基幹道路があるわけです。奥大道、奥の大道に沿って中尊寺というお寺が清衡によって設置されます。それから清衡自身の館、平泉館ですが、これは柳之御所遺跡の場所でしょうかと現在でも言われておりますが、この中尊寺、それから平泉館、そして平泉と中尊寺を結ぶ道路というのがまず造られます。館からお寺に行くための道というのが必要なので、これが設けられていきます。そして、平泉館と奥大道も結ばなければいけないので、この道がまず骨格として整備されているということなのです。

さらに『吾妻鏡』によりますと、清衡は奥大道という東北地方の幹線道路の1町ごとに笠塔婆を建てさせたと言われています。これは、有名な『吾妻鏡』の中の「寺塔已下注文」という頼朝が進軍した後に平泉のほうから提出したリストがあります。頼朝が平泉を占領した後に平泉のほうから、これだけのお寺などがありますから大事にしてくださいという、そういうリストを提出している、そのリストが「寺塔已下注文」で、研究でも度々引用されるものなのです。清衡が奥大道の1町ごとに笠塔婆というものを建てさせたと言っているのですが、実際に奥大道全体にわたって笠塔婆を1町ずつ建てるというのは、規模的にも清衡の支配領域というものを考えましても実際にはちょっと無理であって、恐らくは平泉周辺に限定されていたのではないかと思います。清衡の意図はどういうところにあるのかというと、奥大道は清衡が平泉に入ってくる前からある道なわけですから、既存の道になります。中尊寺ができる前からもちろんあつたわけで、そのもととあつた幹線道路、これを笠塔

婆によって整備する、荘厳するという言葉を使いたいと思います。つまり飾るということです、飾り付ける。今でも都市のメインストリートは、立派な街路樹とか、街灯とかできれいに飾り付けたりしますが、それと同じで、笠塔婆を建てることで平泉周辺の幹線道路を荘厳する、飾り付けるようにしたのではないかと。平泉の中心街路としてこの奥大道を利用して、それを飾り付けるような、そういう目的があったのではないかと思います。これが清衡が笠塔婆を建てたその理由と考えています。

鎌倉と比較しますと、後の鎌倉時代になって、これも『吾妻鏡』に出てくるのですが、後に武蔵国から鎌倉へ入っているときのメインルートとして武蔵大路という大きな道があるのです。これは、化粧坂という坂を越えてくる道なのですが、この化粧坂の卒塔婆に落雷があったという記事があるのです。どうやら鎌倉に入ってくるメインルートのところにも卒塔婆が建っていたらしいということが分かるので、これはひょっとしたら頼朝が平泉に倣って鎌倉の玄関口であるところを卒塔婆によって整備しようとした可能性があるのではないかなと考えております。それだけ清衡の建てた笠塔婆というのは、画期的なものだったのかもしれないということになります。

次の基衡の時代の話にちょっと移りたいと思います。先ほども申しましたように、清衡の時代の中心的な道路はもともとある奥大道と、それから柳之御所跡つまり平泉館と中尊寺を結ぶ道、それから平泉館と奥大道を結ぶ道、この辺りが中心的な道路でした。基衡の時代になりますと毛越寺、観自在王院という大きな寺院が建立されますので、そこから柳之御所へ向かう東西道路が整備されるわけです。毛越寺、観自在王院から東に延びていくもので、柳之御所とは南北道路で結ばれる、こういう東西道路、この整備が基衡の時代に行われるわけです。この東西道路が都市平泉を荘厳する、飾り付ける儀礼的な大路として、毛越寺、観自在王院といった大寺院とともにセットとして整備される、そういう時代です。発掘の成果によりますと、この東西の大路は幅20メートルぐらいの大路で、かなり広い道になるわけです。さらに、道の両側には側溝、水を備えていたということが分かっており、非常に大規模な道なわけです。それがほぼ直線上に延びているということで、これは平城京、平安京を見れば、朱雀大路に近い性格を持ったもの、さらに後の時代の鎌倉の話になれば、若宮大路に近いような儀礼的な道路、そういう性格を持っております。

先ほどもちょっと述べましたが、東西道路が、南北道路がさらに整備されて、柳之御所地域ともここで接続するという、そういう性格を持つようになっております。これが非常に重要な道路であるということは、東西道路と、それからまた年中行事との関係などからも分かってくるのではないかと思います。先ほども触れました「寺塔已下注文」の中に「年中恒例法会」と表現される平泉の寺社で行われる年中行事、代表的な年中行事が



第5図 4期（基衡期の後期）の平泉

〔羽柴2002より〕

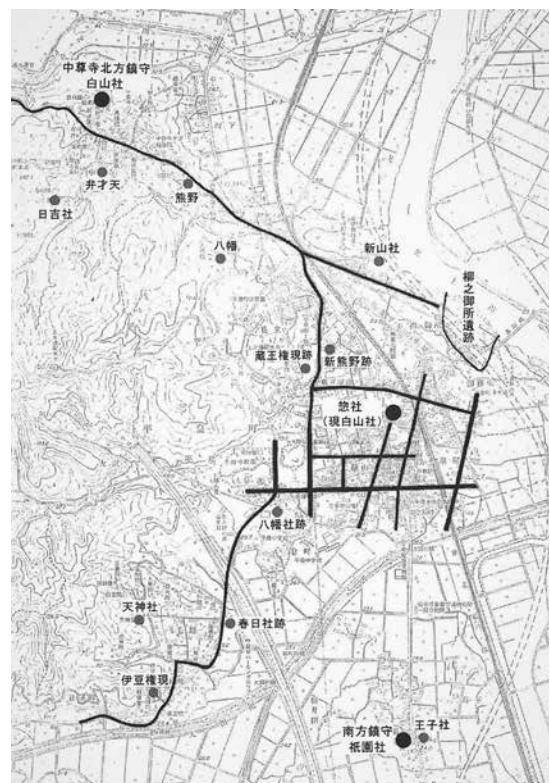
書き上げられています。年中恒例法会は鎌倉時代の後期になりますと、別の史料によりますと、六箇度大法会というふうな表現をされています。年6回の大規模な法会、主要な法会、法要とも表現されていて、平泉を象徴する非常に重要な年中行事として書き上げられているわけです。以下①から⑥までありますけれども、①常楽会、それから②千部会・一切経会、③舍利会、④新熊野会・祇園会、⑤放生会、⑥仁王会と書き上げられておまして、残念ながらそれぞれの法会の開催地は書いていないのです。ただ、内容から見て、②、千部会と一切経会が千部の経典、それから一切経があるところでやらないと、これはできないわけですから、当然中尊寺であろうと思われるわけです。⑤の放生会は、ほかの資料などから、恐らくこれも中尊寺で行われていたのではないかと見られています。

④の新熊野会と祇園会は、それぞれ場所ははっきりと分かっていないのですけれども、平泉には新熊野社と祇園社というのがあったということが分かっておりますので、それぞれの新熊野社と祇園社で行われたのだらうと思われます。⑥番は仁王会ですけれども、これもほかの史料によると、どうやら惣社と呼ばれる神社で行われていたらしいのです。惣社というのはいろんな神様をまとめてお祭りしている、そういう性格の神社であり、よく国府、国の中心となる役所には惣社というのがありますが、どうも平泉にも惣社が置かれていたようで、これは場所がいろんな説があるのですけれども、一説では現在の平泉の白山社の辺りではないかという説もあります。恐らくは、平泉の中心部のどこかにあった。そういう惣社で行われたということが⑥は想定されます。残るのは、①の常楽会と③の舍利会になるのですが、「寺塔已下注文」は基本的には中尊寺と毛越寺のことを詳しく書き上げておまして、恐らくこの①と③につきましても中尊寺、ひょっとしたら毛越寺も含まれるかというような感じであります。

ちなみに、平泉の神社の分布図を見ると、先ほど言った惣社の推定地というのはこの白山社の辺りという説もありますが、結論は出ておりません。それから、祇園社というのは、この南のほうにあったのではないと言われております。幾つかの神社が平泉の中には存在したということなのですが、これを見ましても平泉の中心部の幾つかの場所で6回の重要行事、年中法会が行われていたということが分かります。

そのほか「寺塔已下注文」には別の記事もあって、「一年中間答講」と書かれております。一年を通して問答講と言われる法会が何度も行われていて、具体的には長日延命講、弥陀講、月次問答講、最勝十講といった仏教的な行事が一年を通して行われていて、これらは中尊寺と毛越寺で行われたと書かれておりますので、中尊寺、毛越寺では一年を通じてかなりの回数の重要な仏教行事が行われていたと考えられます。

当然こういった毛越寺・惣社等で行われる仏教行事には、清衡は分かりませんが、毛越寺を整備した基衡、秀衡らが当然参る機会が何度かあったのではないと思われるのですけれども、その場合に彼らは柳之御所遺跡の館から出かけるわけですが、その場合はやはり平泉の支配者ですから、何かふだん着で出かけるわけではありませぬので、それなりに襟を



第1図 平泉における神社の分布

斉藤2010より

正して行列を整えて進列していくというようなことが行われたのだらうと思うのです。家臣たちを連れて、ある程度の人数を整えて、それで館からお寺へと向かうであらうと、一種のパレードなのではないかと思われるわけです。後の時代の鎌倉におきましても、将軍が八幡宮を参詣するときには若宮大路を通して、それなりのお供をつけて、行列を整えて参列するというのをやっておりますので、恐らくそれに近いことがあったのではないかと思います。

そうなりますと、先ほどの繰り返しになりますけれども、館から南北道路を経て、この儀礼的な非常に立派な東西大路をパレードしていき、毛越寺の辺りに行ったりすると思われます。中尊寺に行くときは館からの道ですが、毛越寺に行くときは秀衡の時代に整備された、東西大路というのが儀礼空間としてかなり立派な道と捉えられていますので、当然ここを進列したであらうと思われます。それから、白山社が惣社であるとすれば、惣社に向かうときにもやはり東西大路を経て、南北の道を通してという感じになるのだらうと思いますので、儀礼的に整えないとか、立派な道を使わない手はないということになるわけです。それを平泉の周辺の人たちが見て、お館様は立派だなと感動すると、そういう演出がされると想像されます。

さらに、中尊寺で行われる法会には、毛越寺のお坊さんも呼ばれて参加しているのです。「寺塔已下注文」によると、六大法会というさっき見た6つの大きな法会の際には舞を舞ったり音楽が奏上されたりする、それに参加する舞人とか楽人たちも参加したと記されていますので、毛越寺から中尊寺に向かうお坊さんたち、それから楽人たち、そういった人たちも東西大路を華々しく進んだ可能性もあるかなと、ちょっと妄想になってきましたけれども、この辺は少し想像を膨らませております。

さらに、『吾妻鏡』に興味深い事例があります。これも頼朝が平泉に進軍した後の話、直後の話になるのですが、「寺塔已下注文」は、これだけ立派な寺社がありますから大事にしてくださいよと平泉の地元から頼朝にリストをあげます。それを見た頼朝がこれは大変なものであるということで、平泉の寺院や神社の所領と境内をこれまでと同じように支配して良いと安堵、保証するということです。そこで、これまでの支配を認める安堵をするということを壁書という形で掲示させるのです。壁書、壁に書くということですから、貼り出す紙みたいなものですかね、掲示板みたいなものでしょうか、壁書というものを掲げたというふうに言っているのですが、これを掲げた場所というのが注目されます。それがほかならぬ毛越寺の南大門に掲げたと言っています。

毛越寺の南大門に平泉の寺社の所領を安堵するという、そういう掲示を頼朝は掲げさせているわけですが、この場所はまさに東西大路の起点の場所です。出発点の一番入り口のところになるわけです。非常に目立つ儀礼的な東西大路の起点のところに、これからも平泉の寺社はこれまでどおりの支配をして良いという安堵の書類を掲げさせて、これはもちろん毛越寺が安堵の対象になるということもありますけれども、それだけではなくて平泉全体の話でありますので、ここがいわば一番平泉の象徴的な場所であると言うことです。ここが入り口、玄関先、正面玄関なので、そこにこの掲示を掲げておくと平泉周辺の人たちはみんなここでそれを注目するであらうと、そういう象徴的な場所であったと考えられるわけです。まさに東西大路というのが都市平泉の象徴的な空間であって、まさに入り口のところ、これを頼朝も理解していたのだと、そういうことが想像されるわけです。

ちなみに、東西大路、幅20メートルくらいと申し上げましたけれども、毛越寺とか観自在王院の付近では、秀衡の時代にさらに幅30メートルにまで拡張されているのです。そうなりますと、もともと20メートルあった東西大路がこの辺りで幅がさらに広がって、一種の広場的な空間になりつつあると、そこに人がたくさん集まってくる、そこに掲示をすれば一番効果的だということは、非常に自然な話として理解できるのではないかと。東西大路と、つまり基衡のときに整備された儀礼的な道とその

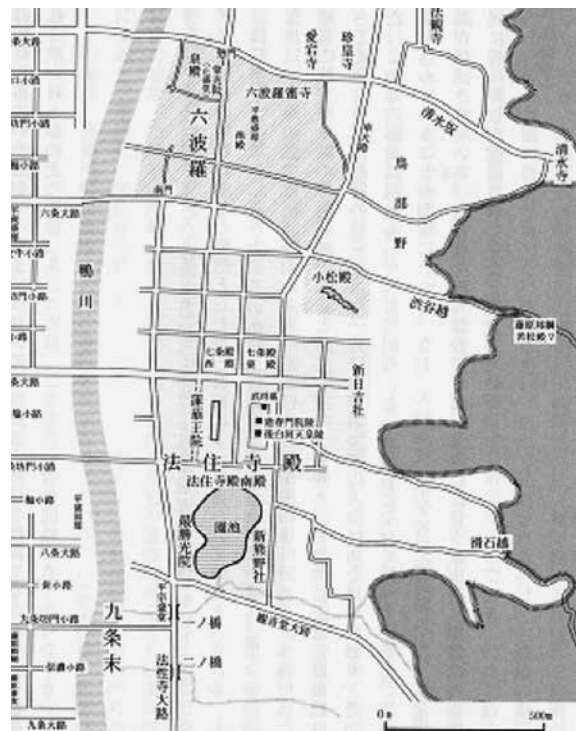
起点の付近がとりわけ都市平泉の荘厳装置、飾りを付ける、飾り付けの一番要の部分であったと見てもいいのかなと思います。

(2) 平氏と六波羅

ここから先は平泉をちょっと離れてしまうのですが、同時代の京都の話に移りたいと思います。ちょうど平泉では基衡の時代ですけれども、基衡と同じ頃に京のミヤコでは平忠盛が六波羅という場所を拠点化しております。京都の東の郊外に六波羅という場所が現在もあり、六波羅密寺という、空也上人が口から仏様を吐き出している、そういう有名なお像とかもあったりします。あの辺りが六波羅で、平氏がここに拠点を置きます。つまり六波羅というのは、京都という中世最大の都市でさらに朝廷の本拠地、ミヤコの一番正統的なミヤコの東の郊外に設置された武士の拠点ということになりますので、武家の拠点の原型と言ってもいいかと思います。六波羅地区の復元地図をみると、鴨川が流れ、その東側に広がっているのが六波羅地区であります。この辺が六波羅で、南のほうは三十三間堂というお堂がある法住寺殿、院の御所があった辺りでありまして、鴨川の西側はいわゆる平安京の碁盤の目状の町が広がっているという、そういう状況です。

六波羅に平氏は拠点を置くのですけれども、何でこの東側の外れのところに平忠盛が拠点を構えたのかということですが、その理由の第1は、家人、家来を含めた武士の集団が居住するためには広い地域が必要で、この東の空間というのは、京都で言えば本当は場末の場所でありまして、あまり開発が進んでいない、どちらかというとお墓とかがあるような信仰の場でありましたので、人があまり住んでいなかった場所なのです。それだけ広い敷地が確保でき、武士が主人を中心に集団で住む、そういうスタイルには適した場所であるということです。全く同じことは平泉でも言えるわけで、武士が主人を中心に集団で住むというのは、まさに柳之御所を中心とした、平泉館を中心とした平泉の形態、原初形態でありまして、このことを入間田宣夫さんの言葉を借りますと、奥州平泉の平泉館というのは軍事貴族の一種のベースキャンプであるとおっしゃっております。うまい言葉だなと思いますが、ベースキャンプであった、そういう性格があって、これは実は六波羅でも全く同じ、平泉も六波羅も武士が主人を中心にその周辺に家来を住まわせるという、ちょっとしたベースキャンプ的なものが最初にできたということです。そのための広い土地が京都の中ではこの東の辺りにあったということです。

それから、平氏が六波羅を拠点とした第2の理由があります。それは、六波羅が交通上の重要なポイントであるということです。六波羅の南のほうを渋谷越という道が通っているのですが、この道ですね、この道が六波羅の南側を通っている道がありまして、これは別に平氏が新しく造った道ではなくて、もともとある道なのですけれども、このルートというのはミヤコから東北のほうに、東のほうに向かっていく道でありまして、もともとの平氏の本拠地は伊勢平氏と呼ばれるように伊勢でありますの



六波羅・法住寺殿復元図(1)

〔野口・山田2004より〕

で、伊勢のほうに抜けるにもこの道が便利であります。それから、六波羅から左のほうに行く道というのがありまして、この南北の道なのですけれども、これはずっと南の奈良のほうに向かっていくわけですね。大和大路という別名もついているぐらいで、奈良、さらには途中で枝分かれして東国のほうにも行くという、そういう幹線道路だったのです。こういった重要な交通ルートがあるということも六波羅の場所の魅力であったと思われます。

(3) 六波羅と平泉

そのような理由から平氏は六波羅に拠点を置くのですが、六波羅と平泉を少し比較してみたいと思います。どちらも一種の武士のベースキャンプ的なところから出発した武家のミヤコの萌芽と言っているのですが、六波羅のほうではモニュメント的な大規模な施設というのはありません。清衡は中尊寺という大変大きな寺院を造ったわけですが、平氏はこの場所に大きなお寺は造っておりません。六波羅密寺というお寺がありましたけれども、これはもともと平氏が入ってくる前からあった寺院で、平安時代からある早い頃からあった寺院ですので、これは平氏とは関係がないと言っていると思います。館の中に小さなお堂は造るのですけれども、中尊寺とか毛越寺のような、ああいう大規模な寺院というのはこの場所には平氏は造っていないわけです。代わりに厳島神社とかを大改修したりするわけですが、ミヤコには造らないということになります。

それから、六波羅では大規模な条坊制は見られません。ちょっと南のほうになると方形の区画がありますが、ここは実は厳密には六波羅ではなくて、法住寺殿という院の御所があるので、むしろ院権力がここにあるので、平安京に近いような縦横垂直の垂直水平の道で区切る碁盤の目状の片りんがあるのですが、六波羅の辺りはこんなふうに道は割と蛇行して自然地形に任せた形の道になっております。名前は五条末とか六条末とか、平安京のほうの大路、小路の延長線上としてつながってはいるのですが、川を越えた途端に道が真っすぐではなくなっていくのです。六波羅の辺りでは、非常に自由な道の筋になっているということです。さらに、平氏は主体的に何か新しい道を造ったかということ、それらの整備は全くなされていなくて、非常に何ていうか便宜的というか、ベースキャンプだから仮の姿でいいぐらいな感じで、あまり本格的な六波羅地域の整備を目指した形跡はありません。一方で平泉のほうは、先ほども申しましたように、儀礼的な空間として東西大路を整備している、そういった意図が明確です。道路を都市の荘厳、つまり都市の魅せ方というふうに言い換えてもいいかもしれませんけれども、平泉の都市はこんなに立派なのだぞということをアピールするための道具として道路を整備しようという、そういう意図が非常に明確であると思います。この平泉の性格が鎌倉では継承されていくのではないかなと思っています。

4. 都市鎌倉と若宮大路

(1) 鶴岡八幡宮の創建

都市鎌倉と若宮大路に入りますが、最初は、鶴岡八幡宮の創建というところから始めていきたいと思います。写真がありますが、これは八幡宮の舞殿です。義経の愛人である静が舞を舞ったという伝承がある舞殿でございますが、これを上のほうから見ているという感じです。

中世の鎌倉の復元図をみると、上が北に、南側が海になります。現在の海岸線より、中世の海岸線はもう少し内側



まで三角状に入り込んでおり、今よりは少し中側まで海が入り込んでいたというところだけは現在の鎌倉と違うのですが、ほかの地形的な面はほぼほぼ今も鎌倉は変わっておりません。この地形がそのまま今も続いていると思っていいかと思います。周りのちょっと濃いめの色のところが山の部分で、真ん中の少し薄い色のところが平地の部分ですが、平地の部分が手のひら状に、指先のように分かれていくみたいにぎざぎざと奥に入っていく、この形を柏の葉というふうに私は呼んでいるのですけれども、このような形の入り方で山地のほうに平地が入り込んでいる、つまりこのちっちゃいぎざぎざ一つ一つが谷なのです。谷戸と呼んでいますけれども、谷状の地形があちこちに広がって行って、その真ん中に若宮大路が通っているということでございます。真ん中の若宮大路を中心にぎざぎざが入っていく、この感じがまるで柏の葉みたいで、真ん中に京風文化で包まれた鎌倉文化があるので、鎌倉というのは「かしわ餅」だというふうに私は昔から言っているのですけれども、いま一つ普及していません。柏の葉状の町がありまして、この葉の一番先端部分ですね、この辺りに若宮大路が走っておりまして、ここに鶴岡八幡宮が位置するという、そういう状況でございます。



〔高橋2005より〕

鶴岡八幡宮の場所は、まさに鎌倉の平坦地の中央の一番奥の場所、非常にいい場所であります。中世都市鎌倉の先進的な中心でもあるし、信仰的な中心と言ってもいいかなと思うのですけれども、最初に八幡宮が造られます。それが治承4年、1180年の10月7日のことで、頼朝が鎌倉に入って僅か5日後なのです。鎌倉に入ってから5日後の12日に、先祖を祭るために小林郷の北山、今の八幡宮のある場所に由比ヶ浜の八幡宮を移して鶴岡八幡宮を創建したと伝えられています。もともと由比ヶ浜の浜のほうに八幡宮があったらしいのです。これは、源頼義が平安時代に京都の石清水八幡宮から勧請したと伝えられていて、場所もちょっとよく分かってはいないのですが、それを移したという形で鶴岡八幡宮が創建されます。それに続けて若宮大路が整備されていきます。鶴岡八幡宮本体ができるの

は1180年ですけれども、その2年後、寿永元年に若宮大路が造られます。若宮というのはそもそも鶴岡若宮、八幡宮のことで、八幡宮の参詣道路として造成されるのですが、『吾妻鏡』によりますと、頼朝が奥さんの政子の安産祈願のために海岸近くから直線道の参詣道を造成したとされております。

(2) 若宮大路の整備

若宮大路の概略図をみると、上が北で一番奥のところに八幡宮があり、そこから直線的に若宮大路が南に向かって延びていきます。若宮大路に対して交わる道、横に交わる道というのは場所が限定されておりました。いろんな道が若宮大路に出られる道としてあったかという、そうではなくて、横から若宮大路に入っていくためには3か所の場所からしか直交できず、それがその名前がそれぞれ上から上ノ下馬、中ノ下馬、下ノ下馬となっています。上中下の3か所で直交するという、そういう仕組みになっておりまして、逆に言うとそのほかの道は若宮大路とはつながっていなかったと考えられています。若宮大路を通ろうと思う人は必ずこの下馬から入っていかないと行けない、下ノ下馬から入っていくとか、中ノ下馬から入っていくとか、そこを通過して入っていかないと若宮大路に入ることとはできないという仕組みになっておりました。交通上は非常に不便で、そんな入る場所が限られているなんていうと、現代でしたら間違いなく渋滞の原因になるわけですが、それは逆に言うと若宮大路というのをそもそもそういう交通の幹線道路として考えていない、非常に儀礼的な道路として考えられているので、とにかく見栄えのほうを重視するという、そういう形になっていたと思われるわけです。

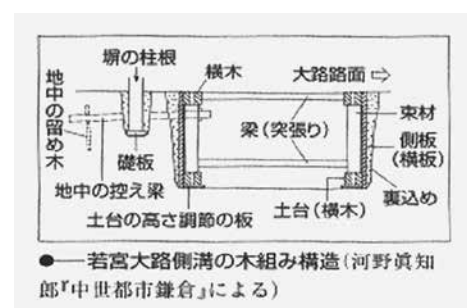
若宮大路には鳥居もありまして、神社から遠いほうから順番に今は一ノ鳥居、二ノ鳥居、三ノ鳥居と呼んでいるのですけれども、逆に中世、江戸時代になってもそうなのですから、神社に近いほうから、つまり神社に一番近いところから一ノ鳥居、二ノ鳥居、三ノ鳥居という呼び方になっておりまして、今とまるで逆なのです。何で逆転してしまったのかよく分からないのですが、一番南のところに、つまり三ノ鳥居のところに建てられているのが浜の大鳥居とも呼ばれる鳥居であり、これは1180年、治承4年のときにもう既に建てられていたのです。何度も再建されていて、現在の鳥居は江戸時代の鳥居なのですけれども、非常に重要な鳥居として大事にされておりました。



〔高橋2005より〕

(3) 若宮大路の発掘

若宮大路は、その周辺で何度も発掘がされておりまして、かなりの数の発掘が両側でされているのです。現在も若宮大路はありますから、道路の中を掘るというわけではなくて、道路の端、道路に面しているお店とかを建て替えると、そこが発掘されるのですけれども、実は鎌倉時代の若宮大路は現在の若宮大路よりも広がったのです。ですから、現在若宮大路沿いに建っているお店は、実は鎌倉時代の若宮大路の上に建ってしまっているということになるわけです。そのため、お店の建て替えで発掘すると、そこからはかつての鎌倉



〔高橋2005より〕

時代の若宮大路の端が見つかり、だんだん若宮大路の状況が分かるようになってきております。それによりますと、若宮大路の道幅は現行の道路幅よりもはるかに広くて、33.6メートルあったということです。平泉の東西大路、一番広いところで30メートルですから、それよりもさらにちょっと広いという感じになります。33.6メートルの道幅があって、さらにその両側の外側に側溝、溝が設けられておりました。その側溝の幅というのが幅3メートルあります。幅3メートルの溝というと、溝というよりはほぼ小川に近い幅があるわけです。飛び越えようと思ったら多分失敗して落ちるのが関の山という、そういう幅です。深さが1.5メートルまである側溝が両側に設けられていました。側溝は箱堀状になっていて、中に木を組んだ木組みが施されていて、土が崩れてこないように土留めをされているという、そういう構造物がありました。側溝は四角く掘られておりまして、その中に木がはめ込まれていて、突っかい棒してありますので、両側から崩れて溝が狭まったりしないように、それをさらに木組みを支える支えの棒が土の中に埋め込まれているという仕組みでございます。このような本格的な溝が施されていたということが発掘で分かっております。

さらに、若宮大路の真ん中には段葛という若宮大路の中央部に1段高く築かれた道がありました。それは、將軍の参詣のときに使われた儀礼的な道で、置道という言い方も平安京などではされており、身分の高い人が歩くところを1段高くして石を積んで道を作るというもので、それを若宮大路でもやっております。現在も若宮大路の真ん中に1段高くなっている道が残されており、現在の段葛は鎌倉時代の段葛をさらに盛っているのですけれども、昔の段葛よりはるかに高くなっているのですけれども、このようなものが道のど真ん中にあります。若宮大路は今でも町の幹線道路なのですが、ど真ん中にちょっと幅の広い中央分離帯があるというような感じの風景で、ちょっと珍しい風景ではあります。若宮大路というのはかなり力を入れて整備されていたということが分かります。



5. 鎌倉の道に関する幕府法

(1) 道へのこだわり

鎌倉の道に関する幕府法の話に移ります。若宮大路に限らず、都市鎌倉では道を非常に大事にしており、幕府が道に対していろいろなこだわりの法令を出しているということが分かっております。

延応2年(1240年)には、小路を狭くすることを禁止するという法令が出ております。続いて寛元3年(1245年)には、家の軒を道に差し出すこと、町屋を造って道を徐々に狭くすること、小さい家を溝の上をまたいで造ることなどを禁止する禁止令が出ます。家の軒先を道に出してはいけませんということ、それから家を造って道のほうにせり出させてはいけませんということ、それから溝の上に小さい家を建てかけてはいけませんという法令を出しているのです。さらに、この法令を知らせた後7日たってもまだそのままであったら、その家を破壊して撤去するようにと、強制代執行みたいなものではないでしょうか、邪魔な違法建築は撤去することを命じています。

一般論として、鎌倉時代の法令がどこまで徹底されたかという点、実態としてはあまり徹底的には貫徹しなかったのではないかというのが見方です。というのは同じような法令が何度も、何度も出さ

れるのです。つまり、何度出してもなかなかうまくいかないということを象徴しているわけで、こういう禁止令が今の現代社会のようにきちんとした罰則規定を設けて、それで担当の役人がきっちりとそれを施行していくという、そういうスタイルにはなっていなかったのも、実態としてはあまり効果はなかったのではないかということですが、幕府が道のことに気を遣っているということは分かります。

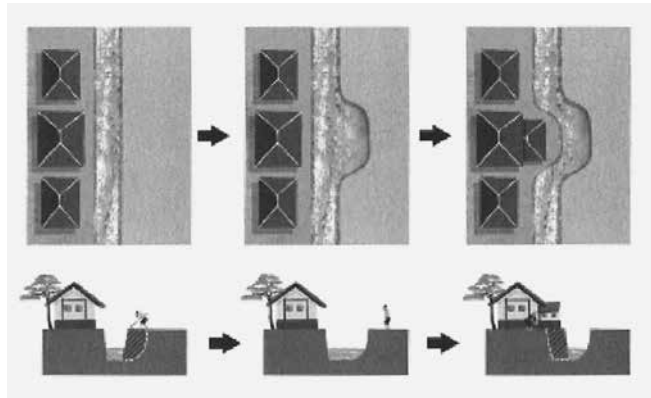
この中で、家の軒を道に差し出すのはいけませんという法令がありますけれども、これは屋根の端を大きく延ばして道側に張り出させるのは駄目ですと言っているのです。これは家の屋根の部分だけですから道路とは直接関係ないような気がしますけれども、アーケードみたいなものが道に張り出してきましたと、これは何が便利になるかといいますと、その下がちょっとした店先の販売空間ができるということです。現在でもよく市場とか、商店街とかで見かける風景かと思いますけれども、軒先に覆いのようなものを出して、その下に台を広げて、そこに品物を並べるという、そういう風景です。屋根が張り出したその下の空間を店先として利用することになってしまう、つまり屋根の下部分が家とか店の一部に取り込まれていってしまうということを意味しています。そういうことがあると、公道の一部が私的な空間になっていってしまうということが起こるわけで、それを予防するために軒を差し出すこともまず禁止すると言っているものです。

実際にはそのようなことがしばしば起こっていたと思われます。『一遍聖絵』という、時宗の開祖の一遍の生涯を描いた鎌倉時代の有名な絵巻物がありますが、一遍は鎌倉へも来ており、鎌倉に入ると入口の巨福呂坂の辺りの風景を描いた場面があります。道の左のほうから進んできているのが一遍上人で、対する右側のほうから馬に乗って駆けつけているのが当時の執権の北条時宗とその家来たちと考えられています。真ん中に道が通っていて、かなり省略して描いてはいますけれども、両側に家が並んでいます。商人とか庶民の住居が並んでいるのですが、道にせり出している部分が凸凹で、家と道の境界線がもうまちまちになっていて、例えば一番左端はもうL字状に建物がせり出してしまっています。こんな感じで建物が道のほうに不規則にせり出すような感じ、こういうことが実際にあったのではないかと考えられるということです。『一遍聖絵』を描いた絵描きは鎌倉には来ていないだろうと考えられていて、この風景は鎌倉の姿をそのままスケッチして描いたものではないと考えられています。本当にこれが鎌倉の街のリアルな風景かという、そうではないのですが、絵巻物の絵というのは当時の人が見て何だこれとは思われなような、ある程度説得力のあるデザインで描かれるというのがお約束です。当然これを見た当時の人たちが何の不自然さも感じずに見ることができる、こんなのないよというのは思わないということです。つまり地方の都市では、このような形で道に家々が張り出してきているというのは一般的な風景であったということで、こんな感じで実際には家が道に張り出してくるということがあり得たわけです。

さらに、先ほどの法令では溝の上に家を造ってはいけないというものがありましたけれども、溝の上に家を造るって、そんなのあり得るのかとも思えません。これは時代が全然違いますが、戦国時代の京都の姿を描いた『洛中洛外図屏風』という屏風をみると、町なかに川が流れていて橋が架かっています。そこまでは川の水の色が見えているのですけれども、そこから先が見えなくなってしまう。川の延長線上に家が建っているわけです。この家は小さい川をまたいで建っていると考えないと理解できないのです。こんな感じの水上家屋が実際に存在していたことが分かるわけで、溝の上に家を建ててしまうということもあり得る話だったのです。

さらに続けると、鎌倉幕府の文永2年の法令で、家の前の大路を掘り上げて家屋を造ることを禁止するという法令があり、何のことやらよく分からないと思うので、これは簡単に図式化してしまい

ましたけれども、だんだんどうなっていくかという順番が書いてあります。大路の横の側溝を掘ってしまって道を変えてしまうのです。側溝の道筋を片側を掘って埋め立てることによって、蛇行させてしまいます。そうすると、この家の前にスペースができるので、そこに家の建て増しをするということが考えられるわけであります。かなり大規模で、当然道そのものが本当に狭くなってしまいますので、やめてくれという話になります。



〔高橋2024より〕

（2）鎌倉の道路掃除

さらに、道路清掃の話をしていきたいと思います。鎌倉では、道路を狭くするなというだけではなくて、ちゃんと掃除しろという法令が出ております。小路の掃除をするようにという法令とか、牛を小路につないではいけないという法令も出されています。牛を小路につないでしまえば、当然牛はふんをするし、いろいろと汚れてくるので、小路につなぐなというのは道をきれいにしろという話とつながってくるわけです。こういった道路清掃するためには、誰か役人が監督しなければいけないということで、監督のための法令が出ておりまして、鎌倉中の橋の修理と家々の前の道の掃除を怠けることないように実行するように保の奉行人に命令すると、もし実行されない場合は担当の奉行人の罪とするというものがあります。町を幾つかの保というので分けているのですが、担当の役人が道路清掃を監督しろと言っていて、もしちゃんとなされなかったら役人の罪になるというような法令も出されています。鎌倉の町なかでは非常に道の清掃というのは重視されていた、鎌倉幕府の法令としては何か妙にちまちました細かい法令なのですが、それだけ鎌倉が道の整備に気を遣っていたということが分かります。

6. 戦国大名と道路掃除

（1）周防山口・大内氏

さらに時代は下って、戦国大名と道路清掃という話です。周防の山口、中国地方です。山口には大内氏という戦国大名がおりました。大内氏の本拠地、山口では、築山館と言われている大内氏の館があったということです。戦国大名はいろんな法令を出しているということは御存じだと思いますけれども、大内氏は『大内氏掟書』という法令を出しており、その中にこんな法令があります。「築山社の門前から松原及び小門にかけての掃除は、毎月の月末日に行うように。掃除の人員は、百石につき1人ずつの割合で家臣から出すように。掃除の責任者と各家臣の負担人数は、あらかじめ決定する。もし当日風や雨で掃除ができない場合は、天気の良い日に延期する」。異様に細かい決まりで、何か戦国大名のイメージからは大分かけ離れた、妙にちまちまとした法令なのですが、築山社というのは先ほどの築山館の近くの神社で、館の前の周りの掃除を毎月月末にやれと、日にちまで指定しているのです。それに動員する人間の数は、百石につき1人の割合と、ちゃんと負担する人数の規律まで決めております。さらに、当日風雨で中止になったら、天気の良い日に延期するなんていうことまで書いてあって、こんなことわざわざ法令で決めるようなことなんでしょうか。もう本当に実施段階で運用すればいいではないですか。非常に細かい指示なのですが、こんなものが何と戦国大名のい

ろんな法令の中にきちんと定められておりまして、それだけ城下のお掃除というのが戦国大名にとっても重要な話であったというふうに見られます。

(2) 相模小田原・北条氏

これは大内氏だけではなく、相模の小田原の北条氏の場合もそういう話があります。相模小田原の北条氏もやはり命令を出しておりまして、北条氏の出した命令、これは法令集ではなくて単独の文書として残っています。そこでは、松原神社の境内の掃除について定め、「先例のとおり、欄干橋から船方村までの宿の住人から百人を出して、掃除と整備をするように。毎月、城郭の掃除の日に行うこと。掃除の前日に西光院と玉龍坊は登城して、掃除の命令を受けることとする。このように決めた上は、もし掃除がされなかった場合は西光院と玉龍坊の罪とする。また、日頃の掃除についても両者が責任を持って行うように」というのがあります。西光院と玉龍坊というのは松原神社の運営に関わるお坊さんですが、この二人が掃除の責任者になって毎月掃除をしると北条氏が命じております。さらに、北条氏から出された法令の別の法令では、境内掃除の見張り役を任命し、「作業の詳細は、西光院と玉龍坊が取り仕切るように。夕暮れの鐘が鳴るまで百人全員が怠けることのないようにせよ。もししっかり働かず、わがままを言うような者がいれば、名前を記して、晩に城へ届け出よ。神社の四方の土塁の草は根こそぎ刈り取れ。池の藻は全て取って、土塁が崩れているところは築き直せ。境内は言うまでもなく、周辺に至るまでちり一つもないように、よくよく気を配って、ことごとく掃除するようにと。」草は根こそぎ刈り取れということを戦国大名が言いますかねとか思うのですが、言っているわけです。何か現代人の感覚から言うと、戦国大名というのは戦に明け暮れていて、勇猛果敢な豪放磊落な人たちが多いのではないかという漠然としたイメージがありますが、非常に細かいですね。これが戦国大名の割と一般的な感覚だったということです。戦国大名の道へのこだわりというのが分かるかと思います。

7. 権力の表象としての道

まとめに、権力の象徴としての道という話をしたいと思います。小田原の話が出てまいりましたけれども、天文20年（1551年）に北条氏の城下町、小田原を訪れた京都南禅寺の東嶺智旺というお坊さんがおります。彼が『明叔録』という禅の文集に小田原の町についてこんなふうに書いています。「町の小路はどこまでも続き、ちり一つない」。ちり一つないということで、北条氏のちり一つなくという指令が結構到達していたという、そういうことでしょうか。「城主の館は木々に包まれて、巨大で壮麗な建物が高々とそびえている」などと称賛しております。お城を立派に造るのが戦国時代ぐらいから行われていくわけで、それを見て、ここの城主がどれだけの威力があるか威勢を感じるということは非常に分かりやすい話ですが、そのほかに城下町の道の様子が実は結構目についていたらしいということなのです。ちり一つない道というのに大勢の人が感動しているわけです。先ほど見たせせこましいような指令というのは、ちゃんとここでは生かされているわけで、つまり清潔で整備の行き届いた道路というのは都市の支配者の統治が行き届いていることを示すものでもあります。つまり支配者の権力を象徴するものとして、道の様子が受け止められていたということになります。まさに権力の象徴としての道という性格があるかと思います。

ここでいきなり話が飛びますけれども、近代初頭のヨーロッパでは、バロック都市計画と呼ばれるような大規模な都市改造計画を実行することが流行したのです。一例として、パリの改造後の姿をみると、君主の強力な権力というのを象徴するために、広くて直線的な大通りというのが縦横に設けら

れています。

翻って日本の場合も、明治の東京も実は例外ではなくて、明治新政府は城下町の江戸を改造して、新しい権力にふさわしい首都東京に改造しようとしたのです。ヨーロッパみたいな広い直線道路を軸とする都市計画をつくっているのですが、結局挫折して、実現はしませんでした。僅かに日比谷にある官庁街だけが実現したわけなのですけれども、かつて東京でもそんなことを計画はしていました。

現在でもロシアとか、北朝鮮とか中国などでは、こういった大通りを利用した軍事パレードというのがまさに権力の見せつける道具として利用されています。そういった形の権力の象徴としての道というのが日本の鎌倉にもあり、さらにその理念は平泉にもあったということをこの話の中では述べてきたつもりです。

日本では少し前までは、各地の都市で巨大な施設の建造が競って行われて、その反動でハコモノ行政というような批判も行われています。市民の方々の益になるような施設というのが第一義ではありますが、その一方で都市のトップは、自分の行政手腕の象徴としてそういったハコモノを造りたがったという側面もなきにしもあらずというわけであります。そういった意味で、日本の中世の武家のミヤコにおける道路というのはハコモノに代わるものといった言い方もできるかなと思います。都市の魅せ方、都市の荘厳というものが徐々に変わっていくということが分かるわけなのです。江戸時代になると、江戸をはじめとしてお城そのもの、天守閣、本丸御殿、壮麗なる建築物を造るというハコモノのミヤコの時代が出現するわけです。実はかつてそんな状況が古代の都市ではあったわけです。平城京、平安京では羅城門とか立派な宮殿、それから多賀城などでも立派な政庁みたいな目に見える形での権威の象徴、権力の象徴が造られていて、それが人々に対して権力を見せつけていたのですけれども、それが平泉、鎌倉、それから戦国城下町ぐらいまでは、建物というよりは道、道路がその代わりになっていったということができ、道の権力の象徴としての性格というのが中世の武家のミヤコの特色であったと言えるのですが、それがまた江戸時代になると古代の都市と同じようなハコモノの時代に戻ってくるということなのです。江戸時代になって「平泉に始まる、道による都市の荘厳の時代」というのが終わりを告げるということで、まさに平泉は武家のミヤコにおける道の重要性を生み出した、画期的な武家のミヤコの萌芽であったというのが本講演の結論でございます。御清聴ありがとうございました。

主要参考文献（著者名あいうえお順）

入間田宣夫『平泉の政治と仏教』（高志書院、2013年）

斉藤利男「仏教都市平泉とその構造—平泉の神社と奥州藤原氏—」（入間田宣夫編『兵たちの極楽浄土』高志書院、2010年）

佐藤信編『古代史講義 宮都篇』（ちくま新書、2020年）

進藤秋輝『古代東北統治の拠点 多賀城』（新泉社、2010年）

高橋慎一郎『武家の古都、鎌倉』（山川出版社、2005年）

高橋慎一郎『日本中世の権力と寺院』（吉川弘文館、2016年）

高橋慎一郎『幻想の都 鎌倉—都市としての歴史をたどる』（光文社新書、2022年）

高橋慎一郎『武士の掟—中世の都市と道—』（吉川弘文館、2024年、初版2012年）

鶴見泰寿『古代国家形成の舞台 飛鳥宮』（新泉社、2015年）

野口実・山田邦和「六波羅の軍事的評価と法住寺殿を含めた空間復元」（『京都女子大学宗教・文化研究所研究紀要』17号、2004年）

羽柴直人「平泉の道路と都市構造の変遷」（入間田宣夫・本澤慎輔編『平泉の世界』（高志書院、2002年）

八重樫忠郎『北のつわものの都 平泉』（新泉社、2015年）

柳原敏昭・江田郁夫編『奥大道—中世の関東と陸奥を結んだ道—』（高志書院、2021年）

山中敏史『古代地方官衙遺跡の研究』（塙書房、1994年）